

GBDEX—DW

顔剥ぎの屠竜刀

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エアポケットのように晴れた日に現れたのは、ピアスを付けた転校生。

彼のスマートフォンには一つのゲームアプリがインストールされていて――

目次

第一章／片翼 “デミ・ウイング”

第一話／ROCKSTEADY	1
第二話／GOON	9
第三話／レオン症候群	18
第四話／濃藍	26
第五話／音の無い部屋	33
第六話／LateLy	42
第七話／stereoman	51
第八話／閃光	59

第一章／片翼 《デミ・ウイング》 第一話／ROCKSTEADY

旅立ちの時はすぐに訪れた
夜だつてのに空は明るかった
見覚えの無い星が馬鹿に目立つ夜だ
珍しく口を開いた君が言った

—————

初夏には遠く、梅雨明けには早い6月の半ば。
梅雨時の半ばとしては奇跡的に晴れた、それはまるでエアポケット
の様な1日だった。

「逆神燈真です、よろしく」
担任に促され、黒板に書かれた文字通りに少年は自分の名前を告げ
た。

僅かなざわめきと集束する視線の先で、少年、燈真は目を伏せ小さ
く御辞儀をする。

「あー、逆神君。
ピアスは一応校則違反だから気をつけるように」
再び促され席に着く燈真へと、くたびれたと形容するのが最適な風
貌の担任が声を投げ、燈真は頷く。

しかし、頷くだけで燈真が左耳のリングピアスを外す事は無かつ
た。

「転校生、ちよつとヤンキーみたい。
チャラいね、こわ」

新しいクラスメートへ好機の視線とヒソヒソ話を受け、燈真は声の

する方へ視線を投げ返す。

切れ長の瞳は二人の女子生徒を映すも、すぐさま外の景色へと向けられた。

雲一つ無い青空、カラツと晴れ上がった1日。

高校三年生の夏前、転入日としては幸先が良いのだろうか。

チャイムが鳴り、担任と入れ替わりに教室へ入ってきた眼鏡の教師が、黒板の文字を大雑把に消していく。

「きりーっ、れーい」

どこか間延びした教師の声にクラスメートは立ち上がって礼をし、やや遅れて燈真もソレに習った。

そして、言われるがままに教科書を開き、ノートを取っていく。

(数学、好きじゃないんだよな……)

しかし、それも途中で意味のない落書きへと変わり、最終的にはペンが止まる。

頬杖をつき、視線は再び窓の外へ。

窓際の一番後ろの席は、余所見をするのには一番良い席だろう。

クーラーは掛かっておらず、開いた窓からは微かに湿気を孕んだ風が入っていた。

遠くに聞こえる車の音と、僅かなざわめき。

自然と起こる欠伸と続く眠気に、燈真は身を委ねた。

—————

「……君、逆神君」

どうやらと言うか、確実に眠っていたらしい。

側で聞こえる高い声に、燈真は薄く目を開く。

視界に射す一筋の明かりにゆっくりと目を慣らし、数秒掛けて瞼を上げた。

「……誰？」

視界に映る声の主、明るい茶髪に大きなメガネ。

小柄なキノコカットをした、前の席の少年へと燈真は声を投げる。ぶしつけと言えぶしつけだが、単刀直入に問うた。

明るい茶髪は地毛だろうか、切り揃えられた前髪を揺らして少年が

答える。

「僕の名前は七星輝。」

逆神君、一限目からずっと眠ってたみたいだけど……もうお昼休みだよ」

「シチセイアキラ……ああ、もう昼なんだな」

律儀にフルネームを答えた少年、輝の名前を反芻し、燈真は寝ぼけ眼を擦った。

机に突っ伏していた身体を起こし、椅子に座ったまま上半身を伸ばす。

教室を見渡せば生徒の姿は疎らで、残っている何人かは机を対面同士にくっつけて弁当箱を広げたりしている。

「お昼、食べないの？」

昼休みのざわめきの中、輝が問い掛ける。

「食べるよ、寝てても腹は減るみたいだ。」

ただ、今日は昼飯を用意しなくてさ……購買なり食堂なりに行かないと」

輝の問い掛けに答えながら燈真は立ち上げるも、何かを思い出したかの様に立ち止まった。

「……行かないと、なんだけど来たばかりで場所がわからない。」

七星君、良ければ場所教えてくれない？」

そう、燈真は転校初日でトイレの場所すらわからないのだ。

購買も食堂も、恐らくはあるのだろうが場所がわからなければ辿り着くのはそれなりに時間が掛かるだろう。

辿り着いた所で時間切れ、になるのは避けたいとすれば……聞けばいい。

何、簡単な事だ、丁度目の前のクラスメートが声を掛けてくれたのだ。

別段臆する事もない、目の前のこのキノコカットは見るからに大人しそうなだし少なくともヤンキーには見えない。

むしろ襟足を伸ばし、ピアスをつけている自分の方がヤンキーと言われるだろう。

目つきが悪いと時折言われる、切れ長の瞳を向けて燈真は問うた。
「良いよ、せっかくだから一緒に昼食べないかな？」

二つ返事の後。

着いて来てとの輝の言葉に燈真は頷き、席を立つ。

教室を抜けて廊下を進み、階段を登り切った先に辿り着いたのは屋上だった。

施錠されていないドアノブを回し、屋上へ歩み出る輝と燈真に、突如として容赦ない照り返しが襲い掛かった。

しかし、目を細める燈真とは反対に輝は瞬きすらせず、歩を進めていく。

「遅いじゃん、……ってその後ろの人が転校生？」

輝の進む先、屋上の端に立てられたビーチパラソルの小陰から声が飛ぶ。

「ごめんね、飲み物買った。

こっちはメールで話した転校生の逆神君、お昼持つて来てなかったらしくてね」

声の主、黒髪の少女へと輝は返事をし、その隣へ座り珈琲の缶を渡した。

そして、燈真を手招きしながら持つて来た自身の弁当箱を広げている。

端から見れば二人はカップルに見えるし、その間を割って入るのはどうかと燈真は躊躇った。

しかし、此処まで来て断る訳にも行かず、丁度腹の虫も「ぐう」とその声を挙げた為に、燈真もパラソルの作る小陰へと進んで腰を下ろした。

「私はあかり、黒野あかり。」

輝の幼なじみで別に恋人とかじゃないからね」

輝を挟んで逆隣、ビニールシートに座る少女が自己紹介をしながら、男物の大きな弁当箱を取り出す。

幼なじみであると言った以上、輝の恋人ではないらしい。

「……弁当、余り？」

各々広げらる二人の弁当箱とは別に、あかりが新たに広げる弁当箱。

数としては余るソレに視線を落とし、燈真は聞いた。

あかりが持つて来たであろうそれは明らかに男物のデザインが施された弁当箱であり、おかずの種類はあかりの物とほぼ同じ。

恐らく別の誰か別の人の分なのだろうか。

「そうそう、部活の朝練があるから、弟の分も先に私が持つて行っただけだね……弟の奴、今日学校サボりみたいで。

結構あるんだよね、サボリ。

だからそんな日は輝と分けて食べるんだけど、今日は……えっと、逆神君に譲ろうってね」

あかりの答えに納得し、燈真は頷く。

そして、小さく「頂きます」と手を合わせ、箸を手を取った。

「……」

輝は小柄だが意外にも良く食べるらしく、弁当箱を空にした後もデザートと言っであんパンを頬張っていた。

隣のあかりも大食いのようで、輝から菓子パンを奪って口にしていく。

「逆神君のピアス、それ女物じゃない？」

飲み干した珈琲の缶を置き、不意にあかりが燈真に声を掛けた。

燈真の左耳たぶに揺れる白金の輪、ソレを見詰めてあかりは返事を待っている。

「……そうだよ」

質問されている以上、答えない訳にもいかず、燈真は一拍の間を置いて短く答えた。

しかし、それ以上の会話の続きを拒む様にポケットからスマホを取り出す。

ほぼ無意識の内にロックを解除しホーム画面を表示させた。

丁度その時だった。

「あつーそのアイコン……GBDEXだよね!？」

ピアスの話には殆ど反応しなかった輝が声を挙げ、燈真の手元を覗き込んで来たのだ。

燈真が持つスマホのホーム画面に映る一つのアイコン、GBDと表示されているソレを輝は見つけたらしい。

「逆神君もやってるんだあ……」

アイコンから視線を燈真へと移し、輝は嬉しそうな声を上げた。

「ああ、ガンダムのゲーム、兄貴と一緒に……やってたと言うかやらされてたと言うか。」

どうやら輝も同じアプリを持っているらしい。

ピアスの話をしたくない燈真としては、こっちの方へ話を移す方が
良い。

「七星君もやってるみたいだし、久々にやってみようか」

あかりとの話は終わったと言う風に、燈真はアイコンをタッチしアプリを起動する。

久々の起動の為、更新データを受信しインストールしていく合間に、輝との会話を進めた。

「何だっけ、実はあんまり覚えてないんだよね、このゲーム」

「GBDEX-DWだよ、ガンダムビルドダイバーズエクストラ・デュアルウオリアー」

自分で作ったガンプラをデータとして取り込んで、自由に対戦出来るゲームだよ」

「あー、そんな名前だっけか。」

プラモデルの写真を撮ってすればゲームで使えるんだっけ」

「そうそう、今年の4月にABからDWに更新されたんだよ。」

って2カ月前に実装された新作を久々になって……」
どうやら更新には時間が掛かるらしい。

思ったより長く空いた間を埋める様に、ピアスの話題は全く入らない様に、燈真は輝との話を続ける。

「あ、ダウンロード終わりみたいだね。」

ログインして、ホームへっと」

輝の声に従い、燈真は新たに更新されたアプリを開く。

ログインして、ホームページへ進んだ。

(懐かしいな、前にやってたのとは色々違うみたいだけど……)

新たに開かれたページ、所謂マイホームと言われる画面に表示されるのは大きな菱形のアイコンが三つと、その隣に立つ「ガンダム」の姿。

それを見て、燈真は懐かしいと小さく息を吐いた。

「おおー、これが逆神君の機体なんだね！」

先程よりも近く、身を乗り出して輝はスマホを覗き込んで感嘆の声を挙げた。

「どうやら彼はこのゲームがとても好きなようだ。」

「黒を基調に赤と金の差し色に、アクセントのライトグリーン……大きな翼は片方だけ？」

大型のライフルと言うか何だろう、ドラゴンの顔みたいだね」

燈真のスマホを覗き込んだまま、画面に映る機体の姿形を口にする輝。

その隣ではあかりが呆れた様に、どこか寂しそうに青空へ視線を向けていた。

「名前はLFDW……なんて読むんだろう」

機体の上に表示される名前の読み方がわからず、輝が首を傾げた。

「何か略称じゃないの？」

隣のあかりが口を挟む。

「名前、何だったかな……」

兄と共に、と言うより兄に「手伝え」と言われやっていたゲームであり、機体等は全て兄が用意していた為に燈真はノータッチなのだ。操作方法等はそれなりに覚えているが、名前はすっかり忘れてしまっていた、元より、覚えていなかった。

「あー、あれだよ。」

デミ・ウイングって呼んでた」

記憶を辿り、兄の声を思い出す。

何しろ高校受験前後、数年前の話だ。

「デミ・ウイング……片方だけの翼、片翼か」

微かに思い出したその単語を輝は反芻し、その意味を口にする。

そして、残るLFの意味を予想しだした所で、燈真が口を開いた。

「思い出した、名前」

丁度その時、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

響く鐘の音が、大気を揺らす。

その音に掻き消されないよう、燈真は

その名前を呼んだ。

「ロストフリーダム……」

“ロストフリーダム” デミ・ウイング」

第二話／GOON

いくつもの生き方が
無限に広がる中で
僕が手にしたのは

—————

“ロストフリーダム”デミ・ウイング、直訳すれば自由を失った片翼、もしくは片翼となって自由を失った者……だろうか。

どちらだろうかは分からないが、その名前には何かしらの理由と由来があるのだろう。

昼休みが終わり、燈真と輝が教室に戻ったのは三限目の予鈴が鳴る頃だった。

急いで階段を下った為か前の席に座る輝は授業が始まってからも暫くの間、荒い息をしていた。

(多分運動音痴なんだろうな……)

眼前の小柄な肩に目をやり、燈真は思う。

階段を急いで下り、廊下を走るのは久々だったのだが、そんな燈真よりも輝の方が大分と遅かったのだ。

走るのが速ければ、大体のスポーツは出来る。

そして、逆もまた然り。

中学校の三年間、サッカー部に所属していた燈真は前者で、どんなスポーツでもある程度の活躍は出来た。

しかし、輝は恐らく後者だ。

小柄でメガネでキノコカット、気弱そうな容姿は自分と真逆か。

そんな輝が何故、自分に声を掛けてくれたのか疑問が浮かぶ。

転校生で物珍しかったからか、偶々席が後ろだったからか。

はたまた、単にとてもフレンドリーで心優しい少年だからか。

昼休みを一緒に過ごしただけでは分からないが、少なくとも悪い奴

では無いだろう。

—————

三限四限と退屈な授業を落書きと居眠りで乗り越え、ホームルームを余所見で過ごす。

鐘が鳴り、終礼が終わると同時に瞬間的に広がったざわめきに紛れ、燈真はあくびを一つ。

白と青のツートンカラーのスポーツバッグに教科書とノート、革製のペンケースを放り込んだ。

丁度その時だった、前の席のキノコカットが此方を振り向いたのは。

「逆神君、良ければ一緒に帰らないかな……？」

「またもや声を掛けて来たキノコカット……もとい、輝。」

三限と四限の間の休み時間中はトイレに籠もっていた為に、話し掛けられる事は無かったものの、やはり、と言った所か。

その声は昼休みの時よりも大きく、明瞭に聞こえる。

どうするか、燈真は一瞬迷うが首を縦に振って頷いた。

「良いよ。」

「ただ俺は電車で帰るけど、七星君は？」

別段断る理由も無い、帰る方向が同じならば一緒に帰っても良いだろう。

「あ、そうか。」

「僕はと言うか大体の子が自転車や徒歩で来てるから、逆神君もてつきりそうかと……」

「……ごめん、まあ校門までは一緒だしさ」

一連の受け答えの結果、輝は落胆した様子で肩を落とした。

そんな輝へ「行こう」と声を掛けつつ、燈真は席を立つ。

他のクラスメート達も此方が気になるのか、チラチラと名前を口にするものの、誰一人として話し掛けては来ない。

（転校して来て初日だし、別に無理して話とかしなくてもいいだろ）

一番後ろの席の為、出て行くのは必然的に教室の後ろ側の戸口となる。

聞こえてくる好奇の会話を適当に流し、燈真は教室を後にした。
廊下を抜け、階段を下る。

玄関口の下駄箱に辿り着くまでの間に

“あれ誰?”

“転校生らしいよ”

“えっ、ヤンキーやん。キノコ君カツアゲされてんの?”

そんな様々な声を聴くも、全てを無視して靴を履き替える。

後ろを着いて来ていた輝は意外にも他のクラスの同級生達に手を振ったりと律儀に挨拶をしていた。

「ちよっと待っててね、自転車取ってくる」

そう言い残し駐輪場へ走る輝の後ろ姿を見送り、燈真はポケットからスマホを取り出した。

ロック画面には二人の男女、ロックを解除せず画面だけを横にスライドさせて行く。

画面が切り替わる度に映るのは同じ人物。

遠くに聞こえる早蝉の声と、不意に聞こえた自転車のベルの音に、燈真は顔を上げた。

「お待たせー」

まだ夕暮れの橙には遠い、6月の日差しを受けて輝く明るい茶髪、電動式の自転車を押す輝がそこに居た。

自転車の前籠には赤色のリュックサック、車体の色も同じだった。返事代わりに軽く手を上げ、燈真は校門へと歩き出す。

距離としてはそう長くもなく、特に会話する事もなく二人は校門をくぐって歩道へ出た。

「ねえ、逆神君」

無言のまま歩を進める燈真に、おずおずと言った様子で輝が声を掛ける。

既に燈真は駅への道を辿っており、輝はどこまで着いて来るのか……しばらく方向は一緒なのかと考えていた所だった。

「……何?」

足を止める事無く、駅へと歩を進めながら燈真は答える。

「良ければ、今日このまま家に来ないかな？」

GBDEX……デュアルウォリアー、一緒にやらない？」

隣を歩く輝は燈真より頭一つ、頭半分程背が低い。

フレームレスの眼鏡の奥、此方を見上げているであろう瞳に、燈真は迷った。

何故こうもまで付いて来るのか、理由は分かった。

簡単に言えば同じゲームをした事があり、言葉通り一緒にゲームをやりたいのだらう。

昼休みに起こしてくれたのは親切心か、この出会いは運が良いのか悪いのか。

初対面ながら距離感と言うものを時たま飛び越えてくる輝に少しだけ、怖さを覚える。

「……良いよ、帰っても別にやる事ねーし。

ただ、先に言ってくれたら無駄に歩かなくて良かったのに。」

しかし、フレンドリーと言えばフレンドリーなのだ。

自身の返事通り帰った所でやる事はない、無為に過ごすだけだ。

無為に時間を潰すよりは有意義だろうか。

燈真の返事に輝は「やった！」と喜びの声を上げた。

—————

結局の所、輝の家は駅方面で向かう先は同じ方向だった。

踏切を渡り、駅前のちよつとした広場を抜ける。

繁華街から伸びるアーケードを進み、少し離れた住宅街の手前。

「ナナホシデンキ」と看板の上がる一軒家が輝の家であった。

「電気屋なんだ、個人経営？」

「うん、一応販売もするけど大手メーカーの工事を下請けするのが主な仕事かな」

店舗部分とは別にある玄関のドアを開く輝に燈真も続く。

階段を上がった先の引き戸に手を掛け、開いた先には10畳程の広い部屋が。

壁際にはベッドとポールハンガー。

使い込まれた学習機の隣にパソコンラックと、更にその隣に大画面

テレビ。

「うわ、テレビでつか……」

子供部屋にしては広く、更にその広さな合わせたのであろうテレビの大きさに燈真は思わず驚きの声を上げた。

「店頭販売のモデル品、型落ちしたから貰ったんだよ」

座布団に座る様に促しながら輝は答える。

途中で寄ったコンビニで買った菓子や飲み物をちゃぶ台に置き、テレビとソレに繋がるゲームを起動。

「プラモデルの写真を画像データとして取り込み、各種ステータスを入力。」

カテゴライズされた武装から当てはまる物を選択し、設定。

君の手で創り出された機体を動かすのは君自身、エクシードアビリティで勝利を掴め!!

デュアルウオリアー ver1.02 絶賛稼動中!!」

数秒の間を置き、流れ出すナレーションとBGM。

聞き覚えの有るような、無いような音と画面に意識を向け、燈真は問うた。

「ゲーム機、最新の機種じゃん。」

「コレも型落ち……な訳無いか」

「最新とは言わないよ、去年のモデルだしね。」

逆神君、GBDEXのアプリを開いてスマホをケーブルでゲーム機に繋いで貰えるかな?」

燈真の問いに答えながら輝はコントローラーを操作し、彼に促されるまま燈真はゲーム機から伸びるケーブルにスマホを繋ぐ。

「パスワードを打ってログインしても良いんだけど、アプリ起動したままゲーム機に繋ぐと自動でログイン出来るんだ。」

あ、ログイン出来たから抜いてもらって大丈夫」

ログインの完了を知らせるアナウンスと共に、画面に映る「ロストフリーダム」デミ・ウイング

スマホを置き、燈真は手渡されたコントローラーを握る。

「こんな画面だったっけ、派手になってる」

久々に見る画面、所謂マイホーム、マイページ画面に眩きを漏らした。

「前作のA B、アッセンブルバトルに比べたらユーザーインターフェース……UIも大分変わってるからね」

兄が作り、兄に言われるがままに触っていたゲームとその機体。燈真は適当にカーソルを動かし、ボタンを押した。

「デミ・ウイング……ウイングガンダム炎をベースにしてるみたいだけど、つて逆神君!？」

今押したのオンラインバトルモードだよ!？」

ボタンを押し、ロード画面に切り替わる様を見て輝が声を上げる。

「あ、ごめん。」

「ついついボタン押ししてしまった」

マッチング待機中から対戦相手が決まったとの電子音、自分と対戦相手の情報が画面に表示された。

「あちゃあ……カジュアルフリーマッチだから戦績はつかないけれど、相手の人はAランクだね……」

逆神君は……Fランク?名前もtest2になってるんだけど……大丈夫?」

輝の声が疑問を孕んだモノに変わり、それと同時に対戦が始まる。

「あ……多分大丈夫、動かし方向となく憶えてるし」
多分大丈夫だろう。

久々に触るゲームだが、何故かやれそうな気はするのだ。

……

市街地に銃声が響く。

止むこと事を知らないそれは、轟音となって街中を揺らしていた。

音の先にはベーススカラーのメタルブラックに赤と金色が映える片翼の機体。

片翼と言えど、二対四枚の翼で構成される大翼である。

LFDW、デミ・ウイングと呼ばれる機体は弾丸の雨に身を晒していた。

着弾と共に減るアーマーポイント、所謂APが緩やかに減っていく。

(いくか、全然痛くないし)

紅瞳に光を宿し、デミ・ウイングは敵機を見据える。

視線の先、サブマシンガンの引き金を絞り続けるのは濃緑色の機影。

此方と違って棒立ちではなく、銃撃しながらも常に移動している。建物の影から影へ、遮蔽物に身を隠しながらの銃撃。

敵機の頭部、ピンク色のバイザーが日に反射し、光が瞬いた。その瞬間、デミ・ウイングは大きく跳んだ。

助走も無しのただの跳躍だが、垂直に上昇したその高度はかなりのモノ。

眼下に広がる市街地を一瞥し、デミ・ウイングがメインウエポンを構える。

エネルギーチューブにより機体と直結されている大型の銃器。

銃器と言うよりは巨砲に近いその名は、ハウリングブラストと言った。

砲身を包むのは龍の顎を模した外装であり、カラーリングは機体と同じ。

僅かに開いた顎、牙の隙間から光が漏れ出す。

右手で取っ手を、左手で砲身を抱え、デミ・ウイングは狙いを定めた。

その間も敵機は銃撃を続けており、サブマシンガンから吐き出される弾丸が黒金の装甲を削っていく。

しかし、デミ・ウイングが怯む事はなかった。

ブースター類を一切吹かしていない為に秒刻みで落下していくも、着地までの滞空時間は長い。

動力炉から莫大なエネルギーが、エメラルドグリーンのチューブを通り巨砲へと充填される。

「いくぞ」

コントローラーを握る燈真は、小さく呟きながらボタンを押した。

瞬間、龍の顎から破壊の吐息が吐き出された。

砲口から放たれるのは、最大出力を示す極太の極光。

赤と金に彩られた漆黒の光条は大気を切り裂き、敵機である濃緑色の機体、ジムスナイパーのカスタム機へと吸い込まれる様に伸びていくも……機影を貫く事は叶わず、地表へ、市街地のアスファルトへと着弾。

衝撃と轟音が周囲を揺らし、一拍の間を置いた後、着弾点を中心に大爆発が起きた。

爆発に継ぐ爆発、火球が臨界点を超えて黒炎を撒き散らす。

黒炎はアスファルトを融解させ、雑居ビルを、マンションを、スーパーマーケットを次々と飲み込んで行った。

僅か数秒、されど数秒。

たったの数秒で市街地を文字通り火の海に変えたデミ・ウイングが、溶け出したアスファルトの沼……燃え盛るクレーターの中心に降り立った。

火炎と熔岩と化したアスファルトに触れ、継続的にダメージが入っていくも気にする素振りは見せない。

炎に照らされ、更なる紅に輝く双眸が見つめるのは、装甲の殆どが焼け、溶けたジムスナイパー。

直撃を避けたとは言え、規格外の威力を持った砲撃は余波だけで敵機をほぼ戦闘不能な状態へと追い込んでいた。

『EX-Dアビリティ、スタンバイ』

不意に鳴り響く電子音声。

聞き慣れないソレはエクシードアビリティの発動を知らせる物で、『GO』と言う合図と共に濃緑の狙撃手がその姿を紅輝に染める。

そして、紅に染まった機影が次々と増殖……質量を持った分身と化し、その全てがビームスナイパーライフルを構え、引き金に指を掛けた。

しかし、それよりも速く。

デミ・ウイングが片翼を羽ばたかせ、突進。

先程の跳躍とは違い、全身の推進機器から緑炎を噴き出しての超高

速移動は初速から既に最高速度を出している。

僅かな残像とスリップストームを引き連れ、相対距離を一瞬にして零へ。

デミ・ウイングは右手に握る巨砲で打突を繰り返した。

龍顎が敵影の胸部を砕き、咆哮と言う名の砲撃を放つ。

超至近距離、所謂零距离射撃による一撃は、奥の手であり必殺技であるEX―Dを発動させた機体をも貫き通す。

砕け、舞い散る破片が両機を叩く。

そして、数刻の間を置いて敵機……紅に輝いていた筈の、狙撃手が爆散した。

第三話／レオン症候群

アイデンティティーに憧れて
でもまた失うのが怖くって
大体そう何時だって
僕ら一つだけの明日探してく

—————

「……勝った。」

思ったより上手く動かせたし、案外やれるもんだな」

大画面テレビに映る自機の後ろ姿と、勝利を告げる電子音声。

リザルト画面が先程のホーム画面へと切り替わり、燈真はコントローラーを床に置いた。

久々に触ったものの、上手くやれたようだ。

記憶は薄れても身体は憶えていたのだろうか。

「……カジュアルマッチ、戦績は付かないと言えどAランクの人に勝っちゃうなんて……凄いよ」

コントローラーを置き、ペットボトルへと手を伸ばす燈真の隣で、輝はポツリ、ポツリと呟く様に声を出した。

その表情は驚きの一言で表現出来るモノで、感嘆と畏怖、その両方が入り混じった息を吐く。

コレが所謂ジャイアントキリングと言うヤツか、そんな言葉が輝の脳裏に走る。

たったの一発で街中を火の海に変えた砲撃の威力も、有り得ない程の速度を出した機体性能も、輝は今まで見た事が無かったのだ。

そして何より特出すべきなのはそのセンス。

今回のバトルフィールドは市街地で、基本的に射線は通り難い。

ましてや今回の相手はAクラス、輝ならば攻撃を当てる事すら難しかっただろう。

しかし、燈真は久々の戦闘にてソレを成したのだ。
見え難いなら見える所に行けば良い。

超高高度まで昇れば、建造物の影も殆ど関係なかった。

屋内に入らない限りは敵の姿は「丸見え」なのだ。

(普通は思いつかないよ……)

ペットボトルを煽り、炭酸水を飲む燈真が輝の視線に気付いた。

「腕ならし終わったし、対戦する?」

ボトルの蓋を閉め、燈真は声を掛ける。

以前兄にやらされていた時も、兄と対戦した覚えがあった。

輝の答えを待たず、コントローラーを片手で動かし、カーソルを
「ローカルマッチ」と記されたアイコンに合わせる。

一緒にやろう、と声を掛けて来たのだから、恐らく対戦したかった
筈だ。

そんな予想に反し、輝は首を横に振る。

「いや、対戦も出来るけど、タッグマッチがしたいなって」

「タッグマッチ……?」

「そう、タッグマッチ。」

前作A Bから一番大きく変わったのが20n2のタッグマッチが
追加された事なんだ。

デュアルウオリアー、二重の、二人の戦士。

タイトル通り、今作の一番のウリはタッグマッチなんだよ」

カーソルがローカルマッチではなくタッグマッチを選択。

対戦でも良かったのだが、タッグマッチがしたいとの申し出を断る
理由もなく、燈真は頷いた。

「四桁のパスワード、どうしよう?」

「んー、0921で」

「誕生日かな?」

咄嗟に四桁の数字を問われると、大体の人が誕生日を答えるんだ
よ」

パソコンデスクの前に座する輝の背から、視線を画面へと移す。

パスワードを打ち込み、対戦相手を自動で探す。

ランクマッチは自分と同ランク帯のマッチングになるが、タッグは高い方のランクに合わせたマッチングになるらしい。

燈真は最下層のFだが、輝はCランク、となればマッチするのはCランクのプレイヤーになるのだろう。

ーーーー

黒犬式號と名付けられた機体が、夕陽に染まる廃墟を駆ける。

鉄血のオルフェンズに登場する量産機

、獅電のカスタム機であるその機体を操るのは輝だ。

G B D E X | D W、前身であるA B ……アッセンブルバトラーに出会ったのは、中学最後のクリスマスだった。

偶然にもネット配信されていた、全国大会の決勝戦。

生中継されていたソレに、プレイヤーとして出ていたのは年の離れた従兄弟。

心優しい従兄弟の、普段は見せない姿に心が踊った。

今こうやって戦場を駆けている機体も、彼から譲って貰った物だ。

地上戦、悪路走行に特化した機体は瓦礫を踏みしめ、大きく跳ぶ。

(僕もあの人みたいになりたい、そう思った。

だから、負け越しても戦ってるんだ！)

輝の意気込みと共に、黒犬が引き金を絞る。

メインウエポンの大型ショットガンが銃口から散弾を吐き出した。

射程は短く、範囲は広く。

散弾が橙に照らされる廃ビルの壁面を穿った。

マッチングしたのは同じCランクのタッグで、両機体共に汎用ながらも高性能なガンダムタイプ。

獅電の頭部をE z | 8のモノに変えた「なんちゃって」とは違い、

此方の銃撃を回避したのは鮮やかなトリコロールに染まるれっきとした「ガンダム」

ショットガンの射程圏から逃れ、高層ビルを背に飛ぶのは衝撃の名を冠する主人公機。

赤、白、青の配色の機体はその背に赤き翼を背負っていた。

(「デステイニーインパルス、カッコいい……」)

黒犬の視線の先、浮遊するヒロイックな機影に輝は心の中で感嘆の声を漏らした。

しかし今は戦いの場、見とれている暇は無い。

デステイニーインパルスが巨砲を構え、一制射。

光条が黒犬を掠め、背後のビルを貫く。

破壊音を後方に残し、跳躍していた黒犬は別のビルの壁面に着地。

同時に足先と踵に組み込まれているホイールが急速回転し、一拍の停滞の後、重力に逆らい黒犬は壁面を走り出した。

「いっけえええー！」

輝は思わず声を上げる。

地上戦を得意とする機体での対空戦、それを成すのはその特徴的な脚部だ。

壁面を駆ける黒犬は再び銃口を敵機へ向け、引き金を絞る。

銃声と共に橙時の空を駆け抜ける散弾は、再び空を切った。

しかし、それは罠だ。

散弾の射線とその広い射角から逃れる為に大きく水平移動したデステイニーインパルスへ、その移動先を読んで放たれた四発のミサイルが迫る。

緩やかに、僅かに弧を描く軌道で弾頭が敵機へと迫り……着弾。

タイムラグはおかずに爆発、四つの火

球が連なって広がった。

その様子を尻目に、ビルを登り切った黒犬はその屋上にて空になったミサイルランチャーを投げ捨てる。

視線の先には爆煙から姿を現す赤き大翼。

フェイズシフト装甲、実弾兵器のダメージをカットするパッシブアビリティにより、デステイニーインパルスに此方からのダメージは殆ど通らない。

有効なのはレーザーやビームと言った光学兵器だが、黒犬の武装は全て実弾兵器である。

更に、飛行能力を有さない黒犬とは反対にデステイニーインパルスはその翼を持って空を自由に翔事が出来る。

即ち相性は最悪、遭遇した時点で此方の不利は決まっていたのだ。
(だけど、負けるつもりはないよ!)

タッグマツチと言えど、二機一組の状態でのスタートではない。

四機がそれぞれ戦場のランダムな位置に配置されてからの試合開始になる。

相手より先に相方と合流する事、そして相手の合流を阻止する事がタッグマツチに置いては重要である。

そして、合流するまでに会敵した場合はどれだけ敵機を「削れるか」もしくは「削られないか」も大事となってくるのだ。

煙を突き抜け、デステイニーインパルスが大剣を引き抜き高速飛翔……する前に、黒犬もまた、両手に近接武器を握り締めて屋上から跳んだ。

シヨットガンの代わりに握るのは、柄が恐ろしく長い斧。

斧と言えどもその刃は縦に長く、刀身と呼んでも良い程だった。

その青銀に輝く刃を振りかざす黒犬が狙うのは、オブジェクトダメージ。

戦場にある建造物等と言ったオブジェクトには当たり判定があり、衝突すればダメージを受ける仕様となっている。

そして、そのダメージはアビリティやステータスに影響されないモノなのだ。

衝撃は同時。

剣による刺突が黒犬の右脇腹を貫き、刃斧がデステイニーインパルスの左肩の付け根に食い込んだ。

しかし、飛翔の勢いの乗った大剣の突き上げよりも、刃斧の叩き付けの方が

重力落下と機体重量も合わさり、勢いとしては強い。

一瞬の拮抗の後に、二機はもつれる様に、錐揉み回転しながら落下していく。

そして、地表へと墜落。

砂塵が舞い上がり、割れた装甲片が舞い散った。

「やった……かな!？」

パソコンのモニター越し、自機の姿は砂塵で見えないが、各種ステータスを見るに此方へオブジェクトダメージは入っていない。

輝が機体を後退させようとコントローラーを握り直したその時。

「あっ!?!」

砂塵を突き破り、光の翼が大きく羽ばたいた。

光翼……それはステイニーインパルスに搭載されている、ヴォワチユール・リユミエールを転利用した高速機動を可能としている状態を示す印し。

左右に残光が流れ、スリップストームにより砂塵が広がる。

視界が砂色に染まり、それを嫌った黒犬は後退。

足裏、爪先と踵に埋め込まれているホイールが音を立てて急速回転。

刃斧を腰だめに構える黒犬が、視界を埋める砂塵から距離を取った。

しかし、砂塵を突き破り輝く翼はその場から動く気配はない。

だが、後退した黒犬の更に後方からは一条の光が放たれており、輝はそれに気付けなかった。

「どう言う、事!?!」

鳴り響くダメージアラート。

ナノラミネートコーティングを施された機体と言えど、光学兵器によるダメージを軽減は出来ても無効化は出来ない。

光条が黒犬の左肩を貫き、爆発。

左腕が肩口から千切れ、砂礫と共に転がっていく。

それを視界の端に収めながら、振り返った黒犬の目に映るのは、大翼……ステイニーシルエツト、バックパックを外し、所謂素体の状態で大砲を投げ捨てる敵機の姿。

翼を捨て、その身を鮮やかなトリコロールカラーから鉄灰色に変えたインパルスガンダム。

敵は揉み合い、落下した後にはバックパックをパージし、遠隔起動させ囷とさせたのだ。

大きく広がり光り輝く翼は目立ち、砂塵の中から噴出しているとは

言えども、視線を誘導するには十分過ぎた。

そして、あえて装甲への通電……フェイズシフトを切り、機体カラーを鉄灰色に変えたのは周囲の廃墟群に紛れるカモフラージュの為。

(避け、れない!!)

気付いた頃には時既に遅し。

バックパックを捨てたとは言え、推進機器を全開にした敵機は既に眼前へと迫っており、振りかざされた大剣……レーザー対艦刀の光刃が煌めいた。

瞬間、赤と金に彩られた一条の黒光が降り注いだ。

ビルとビルの隙間、上空から注がれた一筋の光は鉄灰色の機体の胸元を、半ば砂漠となりつつあった地表をも貫き、一拍の間を置いてインパルスが火球となって大爆発を起こした。

「ごめん、ちよつと手間取った。

マップ見て探せば良かったのに、ずっと画面見ててさ。

七星君見付けるの遅くなった」

更に、地表からも火柱が吹き上がり、周囲へと黒炎と共に烈風が吹き荒れる。

勿論、爆風と黒炎を間近で受けた黒犬も吹き飛び、二、三度程地面を転がっていく。

オブジェクトダメージと黒炎によるエフェクトダメージが黒犬のAPを削るも、輝の視線は自機のステータスから燃え盛る黒炎へと向けられていた。

噴き出す火柱を背に、空から降り立つのは片翼の機影。

トライバル柄の紅炎があしらわれた翼を広げ、デミ・ウィングが左手に持っていた何か……それは黒く煤汚れたガンダムの頭、もう一機のデステイニールパルスの頭を無造作に放り捨てる。

捨てられた頭部は乾いた音を立てて転がり、その音に重なって試合の終わり、電子音声か勝者の名を告げた。

「おし、俺達の勝ちだな」

その声を聞き、燈真は薄く笑った、否、頬を歪めた。

その横顔を見つめる輝は、動けなかった。

第四話／濃藍

解りあいたいから傷付けてしまう
他人よりも君が遠くなる
誰よりも側に居たいだけなのに
私はいつも迷子になる

――

気が付けば壁掛け時計の針は19時を指していた。
開け放した窓からは、虫の音と共に涼しげな夜気が入って来ている。

「あー、時間そろそろまずそうじゃない？」

幾度目かのリザルト画面から目を離し、燈真は口を開いた。

初のタッグマッチを勝利で飾って以降、殆ど休憩もせずに輝と共にゲームに没頭していたのだが……

「あ、ホントだ。」

そろそろお開きにした方が良いかな？」

気付けば日も落ちており、窓の外では月がその姿を現すしていた。

時計の隣、乱雑に詰まれた様でどこか規則性を感じる本棚に一瞬だけ目が行くが、視線を戻した燈真は頷く。

「ずっとゲームしてたら疲れてきたし、ランク？七星君もAに上がったし終わるには丁度良いんじゃないかと思ってさ」

全戦全勝、最後の試合を終えた時点でゲーム内での輝のランクはCからAにまで上がっており、キリが良いと言えばその通りだろう。

ログアウトの手順を手早く済ませ、互いにパソコンやゲームの電源を切る。

「久々にゲームやって楽しかった、ありがとう」

階段を下り、玄関先で燈真は輝へ礼を言った。

「ううん、僕の方こそありがとう。」

誰かと一緒にこのDWやるのは初めてだったからとっても楽し

かったよ！」

返す輝が、律儀にもキノコカットを揺らしてお辞儀をする。その様子に燈真は頷き、最後に軽く手を振って歩き出した。

「……」

履き慣れたバスケットシューズがアーケードを進む。

早い所は既に店じまいを終え、所々でシャツターの閉まる音が響いていた。

行きは輝に連れられだったが、帰りは燈真独りだ。

駅までの道のりは不安だったが、意外にも迷う事は無かった。

商店街のアーケードを抜け、駅前の広場へと出ればもう迷う事はない。

駅へ向かう前にコンビニへ寄り、ミネラルウォーターを買う。

月が昇る夜、涼しいと言えど喉は乾いていた。

広場のベンチへ腰を下ろし、燈真はペットボトルの栓を捻って中身を煽る。

ボトルの中で揺れる水が、街灯に照らされて煌めいた。

その様子を楽しむように燈真はボトルを小さく揺らす。

その時だった、自転車のベルが鳴ったのは。

「逆神君……？」

ベルの音とは真逆のトーンで掛けられる声。

ペットボトルから視線を移した先には、自転車に跨がる少女の姿。

「……誰だっけ、昼休み一緒だった人？」

「あかりだよ、隣のクラスの黒野あかり」

少女はほんの少しだけ眉根を寄せ、自らの名を告げた。

昼休みに会った際、ちゃんと名乗って少しは話もしたのだが、燈真は覚えていない様にも見える。

その事にあかりは眉根を寄せたのだが、燈真は気付けない。

自転車に乗り、サドルに跨がるあかりの長く伸びた足が薄闇に映えた。

膝上丈のスカートの中が見えそうな事に気付き、燈真は視線を逸らす。

「もう夜だけど、バイト終わりとかだったの？」

そんな燈真の様子に気付かず、あかりは声を掛けた。

「……いや、遊んでた帰り。」

七星君に誘われてき、ゲームしてたんだよ」

「ゲーム？ 家上がったの？」

「そう、一緒に帰る途中に良かったら遊ばない？ って」

初対面ながら距離感と言うモノを感じさせず、寧ろ飛び越える様に輝は近付いてくる。

転校初日のクラスメートを家へ呼び、遊ぼうとする人は中々居ないだろう。

俯く燈真は、別の意味で眉根を寄せたあかりの表情に気付かない、否、気付けない。

「……あの子、輝なんだけど。」

ちよつと変わった子だけど仲良くしてくれたら嬉しい。

友達を……誰かを家に上げるなんてここしばらくなかったし、逆神君の事をよつぽど気に入つたんだと思う」

何やら意味深長なあかりの言葉に、思わず燈真は顔を上げた。

しかし、街灯を背にするあかりの表情は、逆光によって見えない。

「確かに変わってる気はするけど、変な奴じゃなさそうだし多分大丈夫
夫

まあ、喧嘩しないようにするよ」

黒塗りとまでは行かないが、陰って見えないその表情を探る事は叶わず、燈真は再び視線をあかりの足元へ落とす。

「そっちは部活帰り？」

続けるには難しそうな話題を変える為、燈真は問うた。

あかりの足元、ペダルを踏む靴は偶然にも燈真の履くバツシユと色違いの物だった。

首もとにはマフラータオル、背負うのは流行っていた箱型のリュック。

問い掛けたものの、おそらく答えは

“アタリ” だろうし、寧ろ問い掛けた後すぐに、昼間に “朝練がく

“と言っていた事を思い出した。

「そうだよ、明日からテスト準備期間で暫く部活動は休止だから、練習の後のミーティングで時間掛かったの。」

しかし、答えの中には初耳な情報もあり、燈真は思わず聞き返す。

「ちよつと待って、明日からテスト一週間前的な感じ？」

担任にも教えてくれなかったんだけど」

中間テストには遅いようで、かと言って期末テストには早い時期だ。

学校が変わればテストの時期やその他諸々も違うのだろうか、不親切な担任の顔が浮かぶものの、その顔はぼやけていた。

「あー、そっちの担任無気力気味だからね、あんまり評判良くないし。

輝もゲームで夢中で話さなかったんだらうね、まあ……あの子運動ダメダメだけどその分、勉強出来るしテスト勉強とかしなくても大丈夫なタイプだから」

忘れていたのか面倒で言わなかったのか、担任は恐らく前者だと思いたい所だ。

あかりの言葉に礼を返し、燈真は立ち上げる。

「期末テストが終わってちよつとすると終業式で、その日は近くの神社でお祭りがあるの。」

鞆のシヨルダーベルトをかけ直しながら、燈真は“へえ”と返事をする。

引越して来たばかりで土地勘の無い燈真にとっては、ソレ以上の返事は出来なかった。

「興味が無い訳じゃないけど、暇なら覗いて見る」

その為、続く言葉も“それなり”のモノにしかならなかったが、無難ではあるだろう。

これ以上の会話も続ける理由は無いだらうと、燈真は軽く会釈を投げ、歩き出そうとした。

しかし、そんな燈真へあかりは再び声を掛ける。

「……昼間はごめんなさい。

ピアスの事、聞かなきゃよかったかなと思って。

蒸し返す訳じゃないけど、あの一瞬苛々してたみたいで、謝りたくて」

「……………」
街灯を背に立つあたりも、改札ですれ違う学生も、電車に揺られるサラリーマンも。

その全員の顔を覚える事なく燈真は帰路を進む。

あかりの最後の言葉へどの様に返したのかも覚えていない。

真新しい匂いがする単身者用のマンションの灯りを点けても、それがフラッシュバックする事は無かった。

四畳半のキツチンを抜け、八畳の板間に入る。

鞆を投げる様に置き、燈真は床に座り込んだ。

座った拍子でズボンのポケットからスマホが滑り落ち、硬質な音を立てた。

画面を見れば時刻は既に21時を過ぎていた。

(……………飯、食わなきゃな)

冷め切らない熱気が残る部屋で、胃が空腹を訴えるのを感じる。

……………感じるは良いが、動く気にはなれない。

転校初日にクラスメートの家に行き、そこそこ長い時間をゲームに費やす。

楽しかったが気を遣った事には変わりなく、腰を下ろした事で疲労感が染み出して来たのも感じた。

疲労感から続く眠気と、訴えを強めだす空腹感。

どちらを先に片すか、迷う時間は無かった。

「……………」

夕食を食べ終え、風呂に入る。

夏場でもゆっくり湯に浸かるのが輝の小さい頃からの習慣だった。

風呂上がりにアイスを食べ、お茶を飲み、歯を磨く。

これも変わらずだ。

リビングのソファに腰掛けうたた寝する父に声を掛け、輝は自室へ向かった。

部屋に入り翌日の準備をしながら輝は今日の出来事を思い返す。

恐そうに見えるらしい転校生との出会いと、彼と共に取った昼食。早蟬の鳴き声を聞いた帰り道と、それから……燈真の戦い振りだ。G B D E X | D W、兄がやるのに付き合っていたと言って居たが、その実力は本物だった。

そして、圧倒的と言える機体ステータス。充電器からスマホを取り外し、D Wのアプリを開く。

戦歴と共に共闘した相手のステータスを確認出来るのだが、デミ・ウイングの各種ステータスは攻撃力と機動力が特出していた。

しかし、A Pに直結する装甲値も一般的な機体より遥かに高い。

前作のA Bと違い、D Wはランクが上がる事により機体ステータスを上昇出来る言わば“昇格ボーナス”があり、各ランク毎にステータスの総合値は決まっているのだ。

(だけど……この機体は違う)

戦歴や各種ステータス等々が非公開設定が成されていないのは、燈真がこのゲームを自ら触っていない事を表す要素の一つだろう。

ゲームで使用するアカウントネームも `test2` のままであり、G B D……ビルドダイバースを模したS N Sでのアバターも初期のままで。

だが、デミ・ウイングのトータルステータスはAランクどころかSランク級である。

理由は分からないが、そんなじよそこのプレイヤーでは太刀打ち出来ないだろう。

輝はCランクへはやつとのことでは上がったのだが、たった数時間でAランクへと昇格出来たのはそのほぼ全てが燈真とデミ・ウイングの圧倒的な力によるモノだった。

輝の脳裏に“チート”の文字が浮かぶが、もしそれを行っていたとしても、それは燈真ではなく彼の兄だろう。

違法なデータの改竄でないとすれば、デミ・ウイングのステータスの高さには何か別の理由がある……

そこで、輝の思考は途切れた。

「寝る時間、もう23時なんだ」

現在起動しているスマホアプリよりも優先度が高いモノ……就寝時間を知らせて鳴るアラームアプリを輝は停め、スマホを再び充電器へとセットした。

23時就寝の7時起床、高校三年間ずっと続けてきた習慣を、輝は今夜もしっかりと続ける。

ベッドへ潜り込み、枕元のリモコンでLEDライトの灯りを消した。

目を瞑れば、直ぐに眠れるだろう。

ーーーー

それは悪夢と言えば悪夢だろう。

視界一面を埋める夜空と、宵闇を埋め尽くさんとばかりに輝く星々。

あかりに照らされる自分は浮遊感を感じながら、星座に掴まろうと手を伸ばす。

しかし、その手は何も掴めないままだ。

衝撃、揺れる視界を染める朱紅。

命の燈が流れ出る感覚で、目が覚めた。

第五話／音の無い部屋

波のように押し寄せてくる

例えようのない寂しささえ

忘れてしまうのが怖い悲しい愛しい

あなたの居ない部屋

あなたの居ない街

ここから私のこの物語は続いていく

—————

私が再び旧校舎の屋上に着いた時には、青空は橙色から濃紺にその色を変えていた。

まだ熱が残る屋上を歩き、その端へ向かう。

底の磨り減ったローファーが足音を立て、微かに聞こえる虫の音と重なった。

規則正しく聞こえるその音は、私だけの二重奏。

時間を掛けて辿り着いた屋上の端、掴んだ欄干はいつの間にかすっかり冷め切っていて、熱くて触れられなかった昼間とは大違いだ。

手摺りを乗り越え、私はゆっくりと夜空を仰ぐ。

濃い藍色の空には星が瞬き、私はその煌めきを掴もうと手を伸ばした。

しかし、届く事は決して無かった。

けれど、星々の輝きは掴めなくても、夜空に飛び込んでいけそうな気がした。

今この瞬間だけでも良い、天地が逆さまになれば良いのに。

そうなれば、目の前に広がる星の海へ飛び込めるのに。

私は一歩、足を前に踏み出した。

屋上の縁からローファーの先が少し飛び出す。

不意に吹く夜風が髪を靡かせ、右耳のリングピアスが揺れた。

涼しげな夜気を孕んだ風に背を押される様に、私は更に進む。

両手は夜空へ伸ばしたまま、躊躇う事なく私は飛んだ。

浮遊感が身体を包み、目一杯伸ばした手が星座を掴もうと広がる。

そして、一拍の間を置いて重力と言うしがらみが私を伽藍締めにし
て……

—————

アラームが鳴った。

枕元のスマホが震えながら音を吐き出す。

ぼやけていた音の輪郭が揺れ、段々とはつきり聞こえてくる。

それは学生の頃によく聴いていたロックバンドの曲だった。

強烈なギターフィードバックのイントロから続く、疾走感のあるメ

ロディと忘れる事無い歌詞。

このボーカルは英詞より日本語の歌詞の方が味があるよ、そんな言葉
を思い出しながら私は目を覚ました。

アラームを止めて時間を見た。

午前7時、寝坊せずに済んだ。

サークルの呑み会は日付が変わっても終わる気配がなく、フェード
アウトするように抜けて帰ったのだが、正解だったようだ。

SNSにアップロードされている写真を見る限り、明け方まで続いて
いたらしい。

寝ぼけ眼を擦り、私はベッドから抜け出した。

裸足で板の間を歩き、冷蔵庫から取り出したミネラルウォーターの

ボトルを開く。

水を口に含み、その心地良い冷たさが目を醒ます。

喉を通る冷感が食道を抜け、胃へと辿り着く頃には、私は風呂場へ
と向かっていた。

鏡に映る化粧つきの顔は、多少は垢抜けてきたのだろうか。

シャワーヘッドから溢れるお湯が雨の様に降り注ぎ、そんな考えごと
と寝汗を流していく。

茶色のボブカットが濡れ、首筋から肩へ、胸から下腹部へと暖かい
液体が流れ落ちる。

小さくはないが決して大きくもない胸と、下腹部に走る大きな傷痕。

股から大腿、膝から足先までを眺め終え、私は目を閉じた。

――

日笠を差して、キャンパスまでの長い一本道を歩く。

カフェで優雅なひと時を過ごす程の余裕はなかったが、ちゃんと目覚めたおかげで朝食を摂る時間はあった。

家を出る前に食べたサンドイッチが良い具合に消化され、エネルギーとなつて私を動かしている、気がする。

このペースなら一限の講義には十分間に合うだろう。

日笠に描かれた猫と地球儀のイラストを見て、今日が6月24日なのを思い出した。

誰が言ったか、6月24日はUFOの日らしい。

窓から「おっくれてるー!!」と叫ぶ輩が居るかもしれない、寧ろ何人が居て欲しいとも思った。

しかし、UFOの日は今の私にとってはまた別の意味を持つ日付なのだ。

同じような格好の大学生に混じり、私も進む。

校舎に入り、階段を登った。

丁度一年前の今頃だったか、ここではいまた別の学校、高校の屋上へ登ったのは。

あの時掴んだ欄干の熱さは未だに覚えている、夜になれば冷め切ったソレも、その後の事も。

「おっはよ」

背後から人影。

160代中程の私より頭一つ小さな、少女と言っても通るであろうサークル仲間が、相合い傘をするように私の隣に並んだ。

彼女は私と同じく、昨夜の呑み会に参加していた。

いつの間にかその姿は見えなくなっていたから、タイミングを見計らって帰ったクチなのだろう。

「なーんか暗い顔してるけど、元カレの事とか思い出したり？」

覗き込んで来る彼女の言葉に、私は返事に詰まった。それは「そうです」と言っている様なものだ。

「一年前の事でしよう？」

連絡取ってないって聞くし、向こうからも連絡がないなら自然消滅だよソレって」

苦笑いにも見える笑みを向けられ、私は薄い笑みを返した。確かにそう言われればそうだ。

「事故」の後、「彼」は半年程目を醒まさなかった。

転落事故による大怪我、半ば植物人間に近い形になってしまったのだ。

そんな彼が奇跡的に目を醒ましたのはバレンタインデー頃だったか。

その頃には私はもう引越して居たし、彼が高校に戻って来る事もなかった。

日常生活に支障が出る程の後遺症を負ったと聞いたのはつい最近だったが、メールすら送る事はしなかった……出来なかった。

向こうからの着信は一度だけあったが、受ける事も出来なかったのだ。

「ホラ、切り替えないと変な男の付け入る隙になっちゃうよ？」

続く言葉にもぐうの音すら出ない。

わかっている、つもりなのだ。

世間一般からすれば、一年……半年以上連絡を取らない事は「そういう事」と括られてしまうだろうか。

それでも、私は未だに右耳のピアスを外す事はしていない。揺れる白金のリングピアスが、窓から射し込む日に煌めいた。

—————

終業のチャイムが鳴る。

相変わらずの間延びした声に続くクラスメート達の一礼。

バラつきのあるソレから目を離し、燈真はスポーツバッグの肩紐を掛けた。

今日からテスト準備期間と言う事で、

“部活ねーしゲーセンな”

“バーガーショップで勉強する？”

そんな声が教室を埋めていく。

高校三年生となれば受験や就職が控えている筈だが、それを感じさせない……考えたくない生徒も少なからず居るようだった。

「逆神君」

前方から聞こえる輝の声に頷き、燈真は歩き出す。

輝とは昨日と同じように昼休みを一緒に過ごし、帰り道も駅まで同じだ。

廊下を進み階段を下る。

下駄箱から靴を取り出して履き替え、昨日と同じく輝を待った。

昨日と違うのは天気で、今日は昼過ぎから雲が広がりぐずついた空模様だ。

今すぐでは無さそうだが、じきに雨が降り始めるだろう。

曇り空を仰ぎ、輝を待つ。

そんな燈真に声を掛ける者達がいた。

「よう、逆神」

視線を空から戻し、声のする方へ向ける。

視線の先には三人の学生が居たが、顔はわからない。

「……………ごめん、誰」

燈真とそう変わらない身長 of 三人組は、燈真の返事に “はあ？” と息を吐いた。

「クラスメートだよ、覚えてねーのか」

三人組の中央、短く刈り込んだ短髪の生徒が続ける。

「暇なら遊ばねーか？」

七星とつるむより、お前 “こっち寄り” だろ」

その口調は荒く、燈真は片眉を上げた。

「メガネオタクより俺らとつるむ方が良いだろうと思つてよ。

ほら、七星のヤツ変わりモンだし、頭おかしいな」

「変わり者？」

“頭がおかしいのはお前だろう” と、燈真は言葉尻を飲み込んで聞

き返す。

「どうやら彼ら三人は所謂ヤンキーの類いで、燈真も“そう”見られているらしい。」

「そうだよ、障害持ちのオタクだよ、他のクラスの奴と揉めた時凄かったしなあ……拘りが強い、つーの？知らんけど」

障害持ちと言う単語を強めて話す短髪の顔には、恐らく笑みが浮かんでいるのだろう。

しかし、その話の内容に燈真を笑わせる様な部分はなかった。

「……そうやって人を障害者呼ばわりして笑う様な奴と遊んでも面白く無さそうだよ、実際障害持ってもお前ら何も理解してなさそうだし」

嘲り笑っているであろう短髪と、その両端のクラスメートに燈真は言葉を投げた。

「わりいけどお前らと遊ぶのは無し、文句あるなら明日な」

そして、彼らの返事を聞く前に足早に歩き出す。

すぐさま手を出して来る様な事は無さそうだが、絡む必要もない。

丁度、背後からベルを鳴らしながら輝が自転車を押して歩み寄って来ていた。

「行こう、面倒くさいのに付き合う暇ねーし」

輝に声を掛けると、反応は鈍いながらも彼も頷いた。

二人で足早にその場を立ち去り、駅へと向かっていく。

教師や他の生徒が見ている手前、三人組が追い掛けて来る事はなかった。

—————

「さっきのクラスのヤンキーグループ、何か言われたの？」

駅前広場のベンチに座る燈真の隣で、輝が問い掛ける。

曇天が今にも雨を降らしそうな素振りで揺れる下、燈真はどう応えるかを考えた。

「……不良グループ？入らないかってさ。」

別にヤンキーとかじゃないけど、俺はそう見えるらしいよ」
少しの間を置き、答える。

嘘は言っていない、全部を話さないだけだ。

障害者云々はとてもデリケートな話であり、燈真にとっても簡単に話す様なモノでもなかった。

「まあ、今日は七星君と帰るって先約あったしさ」

昨夜のあかりの言葉と、先程のクラスメートの言葉、二つを合わせると「何か」が見える様な気もするが、詮索する必要もない。

「雨降りそうだし、と言うか降り出したしどつか店にでも入らない？」

ほら、そのハンバーガーショップとか」

会話を終わるべく燈真は立ち上がり、隣の小柄なキノコカットへ声を掛けた。

丸い縁の眼鏡が此方を向くが、燈真にその表情は見えない。

だが、彼が頷いた事はわかった。

自転車に跨がる輝の隣を、燈真は足早に歩く。

降り始めた雨は秒刻みでその激しさを増し、燈真が駆け出す頃には本降りの手前となっていた。

「やっべ、七星君急げ！」

「逆神君こそ！」

鞆を抱え、燈真は走る。

その少し先を、雨の匂いを掻き分ける様に、輝が自転車で疾走していった。

—————

大手チェーンのハンバーガーショップは、席も多いが混雑していた。

混雑と言ってもその客層は殆どが学生で、燈真が通う高校の学生達だ。

偶然にも空いていた窓際のボックス席に荷物を置き、カウンターへと向かう。

そこまで腹が減っている訳でもないが、店に入った手前何も頼まない訳にもいかないだろう。

チーズバーガーセットの氷抜きメロンソーダ、頼むのは一年振りだろうか。

隣の輝はビッグサイズのバーガセットを二つオーダーしていた。

小柄ながらも大食漢である彼は、昼間にも大きな弁当箱を広げていた。

その小さな身体はどこに入るのか、不思議である。

バーガーセットを乗せたトレイを運び、テーブルに置く。

窓側のソファ席へ座り、燈真は一息着いた。

「少し濡れたけど、ギリギリセーフって感じだね」

対面に座る輝が、燈真の肩越しに、どしや降りの景色を見て口を開いた。

確かにほんの数分遅ければ豪雨の中に身を曝す羽目になっただろう。

頷きながら、燈真はメロンソーダを口に含む。

氷抜きで頼んだ為、そこまで冷えてはいなかったが、逆にそれが丁度良かった。

一口、二口と緑色の液体がストローを通っていく。

「ねえ、逆神君。」

昨日の事なんだけどさ、昨日一緒にしたゲーム、GBDEX―DW」

輝が声のトーンを落とし、口を開いたのと、燈真がチーズバーガーにかぶりついたのは同時だった。

そして更に、隣の席からも声が掛かる。

「やっぱりそうだ、輝じゃん！」

輝の低いトーンとは真逆、周囲のざわめきに負けない声。

見れば隣の席には自分達と同じ様な二人の学生の姿があり、その内の片方……明るく長い金髪の少年がヒラヒラと振っていた。

しかし、声の主はテーブルを挟んだ先、窓際に座る燈真の隣の青年だった。

よく陽に焼けた浅黒い肌に、短く刈った茶髪、ゴーグル焼けを見るに水泳部か近い部活をしているのだろう。

「蓮だよ、中学一緒だっただろうか？」

「こっちは優斗、覚えてねーのかな？」

蓮と名乗った学生はスマホを置き、影のない笑顔で輝へ向ける。その笑顔に輝もまた、笑みを返した。

「いや、忘れた訳じゃなかったけど……蓮君スツゴい背が伸びて大きくなってるからわかんなかったよ。」

優斗君も髪の毛染めてるし……久し振りだね」

どうやら二人は輝の知り合いらしい、着ている制服が違うのと、会話からして学校は別だろう。

そして、話す様子と声色からして二人共に輝と仲は良い様だ。

「テスト前で部活無くてさ、暇だしちよつと遠出して服買うかって話してたんだよ。」

そしたら優斗がバイトしてないからあんまし金無いつつつてさ、かと言って暇だしゲームしてた」

何のゲームをしているのだろうか、燈真は隣のテーブルに置かれたスマホに目を向ける。

スマホとしては大きな液晶画面に映るのは、昨日見たゲーム画面だった。

「あ、ソレあれだ。」

DWだっけ」

口に出すつもりは無かったのだが、燈真は思わず呟いてしまった。

そしてその呟きを輝が聞き逃す事は無く、運動音痴な筈の彼は、予想出来ないスピードで蓮のスマホを覗き込む。

耳を澄ませば優斗が持つスマホからも聞いた覚えのあるBGMが流れており、二人がやっていたゲームmGBDEX―DWで間違いなようだった。

第六話／Lateley

L a t e l e y
I t h i n k I ' m d o i n g f i n e
D o n ' t k n o w w h a t ' s g o i n g o n
B u t I ' m o u t o f i t
M a y b e
D e s p e r a t e l o n g e n o u g h
T o g e t b o r e d o f b e i n g m a d
B u t s t i l l i t ' s o u t t h e r e
Y e a h s t i l l i t ' s o u t t h e r e

対訳

うまくやれてるとは思う
世論なんて知ったこっちゃないけど
僕には関係ないことだから
多分
長い間自暴自棄になっていて
そんな自分に嫌気がさしたんだ
それでもまだ僕の周りから完全に消えた訳じゃない
まだそこにいるんだよ

—————

ガンダムビルドバイズエクストラ・デュアルウォリアー

機動戦士ガンダムから続くテレビアニメシリーズ最新作の名を冠
しつつ、エクストラ……規格外の意味を込められたそのゲームは中高
生のみならず大学生や社会人にも人気の作品である。

その前身、前作品であるアッセンブルバトラーに引き続き自作した

プラモデルの画像データを取り込み、ゲーム内で3Dモデルデータとして出力するのは変わらずで、他社製品もデータ取り込みに限るが使用可能だ。

所謂「ガンダムゲー」が乱雑に産まれては消えると言う負の流れを断ち切る為に企画が上がったこのシリーズは、見事その流れを断ち切る事が出来たのであった。

アーケードゲームの二本柱であるVSシリーズと戦場の絆。

そして、家庭用及びスマートフォン向けのGBDEX-DW。

バンダイナムコゲームスとホビー事業部の尽力により、DWはアーケード二作品に並ぶ程のプレイヤー数を獲得したのだ。

自身で作成したキットを自由自在に動かす、そこにはロマンがあった。

スマホアプリverの操作性はVSシリーズに近いが、家庭用verは更に細かい挙動が可能で、従来の「モツサリ感」が消えた上ですらまでに無い「リアルさ」を追求している。

開発スタッフには他社からスカウトされた者も多数居り、某ロボットゲーを彷彿とさせる部分もあった。

「……」

スマホアプリと云えど、その操作性は決して悪くはない。

寧ろスマホの普及率から見るに、DWのユーザー数は相当なモノだ。

現に輝の同級生が二人共にDWのプレイヤーであった。

「まさか蓮君もやってたなんてね、それも優斗君と二人共Sランクなんて凄いよ……」

燈真の声を皮切りに、輝は中学時代の同級生との会話を楽しんでいた。

勿論その会話の内容はDWであり、燈真がバーガーを食べ終わる頃にはタッグでのローカルマッチで遊ぶ事が決まっていた。

「んー、スマホでやるのも久々だから、七星君頼んだ」

おしぼりで手を拭き、燈真は輝にスマホを手渡す。

途中までの操作は何となく分かるのだが、タッグマッチの設定はか

らきしだった。

スマホを受け取った輝は手早くセッティングし、ものの数分で燈真へ返した。

画面は既にマッチング待機中となっており、じきに試合が始まるのだろう。

「そっぴや友達君、名前は？」

隣のテーブル、よく日に焼けた好青年が声を掛ける。

背も高く、細く見えるが引き締まった筋肉質な身体付きからは、ゲームをやるようなタイプにも見えない。

(まあ、俺もそんなもんか)

そうは言えど、燈真自身も見かけだけならば不良で同じようなものだ。

「燈真、トーマでいいよ」

蓮へと短い返事を投げ、燈真は頷く。

蓮はおそらく笑みを向けているのだろう、目を合わせようと視線を向けるが、それは叶わず。

手に持つスマホが音を立て、戦いの始まりを告げると同時に、雷鳴が轟いた。

「雨凄いな、通り雨ならいいけど」

「あ、バーガー食べるの忘れてた」

「輝相変わらずじゃん、一つの事に集中したら他が見えなくなる癖そのまんま」

「お、始まる。」

スマホって上手くやれんのかな？」

稲光を受ける四人はそれぞれ、手中の電子の戦場へ瞳を向けた。

—————

「ロストフリーダム」デミ・ウイング

デミ・ウイングと呼ばれるその機体は、二対四枚の翼から構成される片翼を羽ばたかせ、湖上の空を飛んでいた。

飛行能力は持たないが、全身の推進機器を全開にして夜の帳を切り裂いていく。

胸部から伸びる二本の尖角が月光に煌めくと同時に、視線の先に鮮やかな光が瞬いた。

夜空に燃え上がる炎、その色は目に鮮やかな紅。

全身を鮮烈なる紅色に染め上げる機影が、炎翼をはためかせ、デミ・ウイングへと迫っていた。

ダブルオースカイ・朱凰。

ビルドダイバーズの主人公機であるダブルオースカイをベースに、ビルドファイターズ外伝主人公機のウイングゼロ炎を組み合わせた機体。

燃え上がる炎を模した翼と、特徴的なコーンスラスタ―……ゼロ炎とダブルオースカイ両方の特徴を有する高機動高性能万能機を操るのは、蓮だ。

同じ翼、そして同じ相貌を持つデミ・ウイングと朱凰のシルエットはどこか似通っており、兄弟機の様にも見える。

紅の翼に炎を宿し、夜空を飛翔し迫る朱凰へとデミ・ウイングが両手に抱える砲身を向ける。

竜の顎を模した砲口からは燐光が漏れ出し、臨界点を越えた光は死の吐息となって吐き出される。

最大出力、極太の光条が冷めた夜気を灼いて疾った。

しかし、紅に縁取られた黒金の光が紅炎を捉える事は叶わず。

光条を寸の所で避けつつも、最高速度を緩めない朱凰はデミ・ウイングとの相対距離を一気に詰め、勢いそのままに左手で握る大剣を突き出した。

迫る切っ先を、主兵装であるハウリングブラストを盾にデミ・ウイングが受け止める。

着撃の衝撃が機体を揺らしスラスタ―の炎が舞い散る。

続くのは更なる衝撃と閃光、朱凰の右手……バーストレールガンのマズルフラッシュが瞬き、一瞬だが燈真の視界を埋める。

しかしそれは一瞬と言えど……戦場ではその一瞬が命取りだ。

デミ・ウイングの紅瞳が敵影を探して揺らめくも、捉える事は出来ない。

揺れる瞳に更なる衝撃、デミウイングの左側へと回り込んだ朱鳳の斬撃が肩口を切り裂いた。

「えっ速くね!？」

初手の斬撃から続く連撃を避ける事は叶わず。

デミ・ウイングが距離を取ろうとブースターを吹かすも、朱鳳は同等以上の速度で追従してくる。

巨砲であるハウリングブラストの取り回しの悪さと、高機動接近戦を仕掛けてくる朱鳳との相性は悪い。

「そつちも速いよ、Cクラスの動きじゃない」

昨日の対戦とは打って変わっての苦戦と、予想以上の速さに燈真は思わず声を挙げた。

その隣で蓮も続けるが、その声には真剣さがあつた。

幾度目かの斬撃を巨砲で受け、衝撃で片翼が揺れる。

勢いの乗った一撃に機体が後方へ吹き飛んだのは……好機だ。

僅かだが確実に開いた相対距離を燈真は……デミ・ウイングは見逃さない。

瞬時に距離を詰める紅の機影より早く、デミ・ウイングがサブウェポンを展開。

リアスカート両端に接続されたアームごと、ブレードバスターライフルが前方へとその砲口を向けると同時に光条が放たれた。

その色は主兵装と同じく紅に縁取られた黒金であり、至近距離で放たれた光を朱鳳は避けきれないと踏んでGNフィールド、所謂バリアを展開。

二条の光が朱鳳の展開する光膜に着弾、しかし一瞬の拮抗の後にバリアを貫通。

光条が朱鳳の左脇腹と右上腕を削り、闇夜に抜けていく。

ブレードバスターライフルはウイングガンダムのバスターライフルをベースにしている為、サブウェポンと言えどもその威力は高く、直撃すれば大ダメージは必至。

蓮が至近距離での射撃に反応し、バリアを展開出来たのは、中学生の頃からずっと続けている水球で鍛えられた動体視力と反射神経の

賜物だろう。

迷う暇は無い、後退を選択した朱凰は先程までの猛攻から一転し眼下の湖へと落ちて行く。

夜気を受けて自由落下していく紅の機影。

距離を取れた事により、デミ・ウイングがここぞとばかりに巨砲と二丁の長銃を撃ち放つ。

しかし、そのどれもが朱凰を捉える事は出来ずに空を切り、水面に着弾して次々と大爆発を……莫大な熱量が水蒸気爆発を起こしている。

水蒸気爆発が起こす轟音と衝撃に湖が、夜の大気が揺れ動いた。

爆発により湖の水が気化し、巻き起こる気化冷却が周囲の気温を急激に下げている。

その低下速度は瞬間的だが、下げ幅は摂取零度以下となり……結果、湖畔上に氷の華が咲き乱れた。

湖全面とは言わないものの、かなりの範囲を氷原と変えたデミ・ウイングの砲撃、その威力と熱量に、そしてとある点に蓮は眉を潜める。

しかし、眉を潜めつつもゲームを止める事は無かった。

水蒸気爆発から続く気化冷却と、雪華の舞う氷原を飛ぶのは燃える火炎鳥。

背負っていた盾を機首にし、大きく翼を広げる可変形態、バードモードへ姿を変えた朱凰が高速飛翔。

デミ・ウイングの砲撃を錐揉み回転しながら回避し、EX―Dアビリティの発動音声と共に身に纏う紅の炎が巨大な翼となって激しく燃え上がる。

纏う紅炎はウイングゼロ炎に搭載されている特殊システム、炎システムから生み出される力。

そして、組み合わせられるはダブルオースカイの切り札とも言える、トランザムインフィニティ。

二種類の異なるエクストラアビリティを重ね合わせて発動させるのが、エクストラデュアル……EX―Dアビリティなのだ。

文字通りの火炎鳥となった朱凰が夜空へ羽ばたき、相対距離を灼き切った。

嘶きにも聞こえるのは紅炎が爆ぜる音。

迫る火炎鳥へとデミ・ウイングが巨砲を向ける。

一拍の間、フルチャージを終えた竜の顎から吐き出されるのは死の吐息。

しかし、朱凰は巨砲の一撃に真つ向からぶつかり、身に纏っていた炎がより一層激しく燃え上がると同時に大爆発が起きた。

夜の闇色を塗り潰す光は一瞬で、爆炎を突き抜け朱凰が姿を現す。切り札であるEX-Dアビリティを発動せた今、朱凰のステータスは大幅に上昇していた。

デミ・ウイングの砲撃を受けきり、その眼前へと迫る紅の機体。

バードモードから通常形態へと姿を変える朱凰の前に、デミウイングは咄嗟にその巨砲を自身の前へ、盾として構えた。

砲撃する間、チャージの時間は無い。

交錯する双眸。

朱凰の握る大剣、炎を纏うバスターソードが夜の冷めた空気を灼き貫いて放たれた。

デミ・ウイングが盾とする巨砲は身を隠すには十分なサイズだが、あくまでも武装の一つ。

盾ではなく巨砲であるハウリングブラストの中央に炎刃の切っ先が入り、勢いを失う事なくその刀身が突き刺さっていく。

止まる素振りを見せない刺突、炎刃が巨砲を貫通するのは一瞬だった。

「通ったな!!」

デミ・ウイングの抱える巨砲の内側、燃え盛る炎の刃の切っ先がその姿を現す。

その様子に蓮は心の中で拳を握った。

しかし、その表情は瞬時に一転。

黒目がちなその眼が大きく見開かれ、驚愕の光景が瞳に写し出された。

朱凰が放った炎刃による渾身の一撃は、盾として構えられた巨砲を確かに貫いた筈だった。

しかし、その再び切っ先が姿を現し、デミ・ウイングの胸元へと伸びた瞬間。

貫かれた筈のハウリングブラストが音を立てて左右に分かれたのだ。

それは炎刃に貫通された事による破損ではなく、機能としての分割。

「思い出した……モードチェンジ出来んだよ、この武器」

巨砲はその砲身の中央から左右に分かれ、一振りの剣と一丁の銃へ姿を変える。

モードチェンジの電子音声を掻き消すのは、ハウリングライフルの銃声。

デミ・ウイングの左手が握るライフルは、機体と直結しているチューブからのエネルギー供給を失ってはいるものの、その取り回しはブラストモード時よりも遙かに上。

光条ではなく光弾を三点制射し、その全てが敵機を打ち据えた。

威力は数段落ちるが速射性も上昇しており、光弾が朱凰の胸部を、右の脇腹と肩口を抉る。

更に、右手に握ったままの巨砲の基部、分割された部位からは漆黒の雷光が噴出。

紅と金の極光に彩られた稲妻が刃の形を成して閃いた。

「それは、ズルくないか!？」

驚愕の事態から続く反撃、予想外の攻守反転に蓮は思わず声を上げる。

しかしその声色に憤りは無い。

砲撃以外の攻撃をして来なかったとは言え、デミ・ウイングが他の攻撃方法や武装を持たない可能性は決して高くは無かった筈だ。

不注意と言えば不注意、EX-Dアビリティの発動で押し切れると思ってしまった蓮自身の甘さが招いた事態なのだ。

銃撃を受けて朱凰の装甲が砕け散る。

EX―Dアビリティによる能力上昇によってダメージは抑えられているものの、無視出来ない程のアサルトポイント、機体のAPが数値が減った。

迸り、煌めく雷光。

デミ・ウイングの握るハウリングソードが軌道上の大气を灼き斬り、雷刃が朱凰の首を落とさんと迫る。

しかし、そう易々と首を落とされる朱凰と蓮ではない。

横薙の斬撃を大剣で受け止め、右手に握るバーストレールガンを敵機へと押し付け零距离射撃。

対するデミ・ウイングも同じくハウリングライフルを朱凰へと向け、その引き金を引き絞った。

重なり合う銃声と衝撃。

揺れる翼、紅炎と雷光が舞い散る。

「所謂本気モードの朱凰について来るなんて、やるじゃん……だけど、今からはもっと凄いや」

「第二ラウンドってやつ？」

「そう言う事!!」

鏢迫り合う二振りの刃。

片翼と紅翼が互いにその存在を強調するように、そして互いに喰らい合うように、大きく羽撃く。

第七話／stereoman

I'm all alone thinking of the
yesterday blues
I don't like to do
But I ain't got nothing else
to do
I've got a friend
He's here now
He lives in my head
When I'm all alone I talk to
my stereo man
I just can't let go
It makes me sick

対訳

一人つきりで昨日の嫌なことを思い出してる
こんな風にしたいわけじゃないよ
だけど他にすることがないんだ
僕には友達がいる
今ここにいるよ
頭の中にね
僕は一人つきりの時はステレオマンと話をする
やり過ぎせないんだよね
うんざりしちゃうよ

—————

閃光と衝撃に続くダメージアラート。
視認するよりも、レーダーに反応するよりも速く放たれたのは闇夜

を切り裂く一筋の光だった。

(この距離で!?)

自機の被弾を告げる電子音に輝は驚きの表情を浮かべる。

直撃では無いものの被弾したと言う事実と、それを成したのが此方の索敵範囲外からの攻撃である事に驚きを隠せない。

湖畔に聳え立つ古城と湖上に煌めく雷光と紅炎を遠目に見れば、それは美しい光景だが、実際は激闘の印し。

見とれていた自分が間抜けだった。

自戒と後悔が胸を押すも、打ち拉がれる暇は無い。

輝は機体を左右に振りながら走らせ、敵機を索敵する。

レーダーや視界にも映らない程の遠距離から放たれる砲撃は、初撃以降の動きを見せない様子からして連射は出来ないのだろう。

両足端々のホイールが唸りを上げ、黒犬が煉瓦で舗装された通りを走破する。

たどり着いた先は、湖畔にその姿を映す古城の敷地内。

城門を飛び越え、着地と同時に再度の光条が闇を切り裂いた。

しかし、光は夜の闇を貫くが黒犬の真横を抜けていき、城門を貫いて宵闇に消えていく。

(発射間隔はおよそ5秒……次が来る前に、いや、多分向こうから来る!)

城門から立ち上る白煙をスリップストームに巻き込み、黒犬が疾走。

古城の中庭に躍り出ると同時に反転し、視線を上へ向ける。

ゲーム画面右上、レーダーに映る敵機との距離は急速に縮まってきた……

「来たー!」

敵影が視界に映ると同時に、黒犬が右手に持つミサイルランチャーの引き金を絞った。

コンマ程のタイムラグの後に放たれる四つの弾頭は、吸い込まれる様に敵影へと向かい、着弾と同時に爆発。

闇夜を爆炎が照らし、爆風が周囲に吹き荒れるもレーダーの反応は

消えず。

爆煙を突き破り姿を現したのは、月灯りに照らされ漆黒に輝く、大翼を広げる一頭の翼竜だった。

(ワイ、バーン!!)

HGサイズの範疇には収まっているがその巨躯は黒犬よりも大きく、鎧に包まれている為にベース機体が見えない。

ベース機が判別出来ないと言う事は、機体由来となるベースのEXアビリティが予想出来ないのだ。

また、二度あつた遠距離攻撃の方法も分からない状態だ。

黒鎧を纏う翼竜の、おそらく口に当たる部分が明滅。

一拍の間を置いて、竜の口元から光弾が横殴りの雨となって黒犬へと放たれた。

「収束と拡散、2パターンあるよ」

優斗の声を耳に、輝は唇を噛んだ。

本当に自分の間抜けさや迂闊さが恨めしい。

ゲームと言えども、戦績は付かないローカルマッチと言えども……こうも負けへ負けへと進む様な、自らのミスに腹が立つ。

しかし、裏をかく事やフェイントと言った勝敗に関わる要因を読み、自ら使う事が出来るからこそそのSランクプレイヤーなのだろう。

(だけど……負けない!!)

横殴りの雨が黒犬を叩く。

ナノラミネート装甲と言えど、光の散弾をノーダメージで受けきる事は出来ない。

だがしかし、一撃で戦闘不能になる事もなかった。

ミサイルランチャーを投げ捨てた黒犬が取り出したのは、主武装である大型ショットガン。

その射角は広く、狙い定める事なく発砲すると同時に再度の閃光。実弾と光弾が互いを喰らい合う様にぶつかり、対消滅を起こす。

その後の停滞は一瞬、弾かれたかの様に両機共が推進機器を吹かし動き出した。

翼竜は続いて撃ち込まれる散弾をもともせず突進し、予想以上

の初速に避けきれないと踏んだ黒犬が右腕を掲げる。

衝撃と共に激突音。

あまりの威力に掲げた盾ごと黒犬の身体が吹き飛ぶが、輝は冷静に機体を操作する。

空中で姿勢を整え、黒犬が足元から着地したのは城の壁面。

着地の衝撃で壁が碎けるが構わない。

急速回転するホイールで壁面の破片を弾き飛ばし、黒犬が壁面を疾走。

此方の銃撃は通らないのは予想通り、狙うはステータス差を無視して固定値を与えられるオブジェクトダメージだが……疾走する黒犬に、翼竜が急速接近。

瞬間、黒犬はホイールにフルブレーキを、急制動を掛けた。

音を立てて碎ける壁面、踏ん張る右足を軸にしその身体が地面とは直角に水平回転。

投げ捨てた銃器の代わりに握るのは、柄の長いブレードアックス。

疾走のからのフルブレーキによる「タメ」と回転と遠心力を乗せた刃斧の一撃が眼前まで迫っていた翼竜の頭部に突き刺さる。

幾度目かの破砕音、頭上からの一撃をまともに喰らった翼竜は中庭へと叩き付けられ、地面を大きく抉ってその動きを停める。

舞い上がる土煙。

僅かに遅れて着地した黒犬はすかさず銃器を回収し、ノーロックでの牽制射撃。

発砲音に重なり響くは跳弾音、散弾を受けた翼竜がその翼を大きく広げた。

そして、咆哮の如く轟くブースターの起動音が続く。

全身の推進機器から炎を吐き出し、翼竜が再び羽ばたく。

月光を背に、飛ぶ姿は異形の竜から変化していく。

左右の肩口からマントの様に伸びる翼膜には二種三刃、左右の手には両刃の剣。

翼竜の顔は背部に回り、強靱な尻尾と変わる。

白をベースカラーとしつつも重厚感のある漆黒の鎧を身に纏い、浮かび上がるは戦神（いくさがみ）。

D Xをベースに改造されたその機体は、名を戦神と言った。

蓮にはネーミングセンスを突っ込まれたが、優斗からすれば朱凰と名付けた向こうも向こうだ。

「追い掛けっこは面白くないだろ？」

言葉は後方へ置き去りに、戦神が剣を構えて黒犬へ強襲。

夜気を斬り、繰り出されるのは勢いの乗った刺突。

剣先が大気を貫き、黒犬の掲げる盾を打ち据える。

そして更に一步踏み込み、刺突により弾かれた盾へと袈裟懸けの斬撃を叩き込んだ。

装甲値と攻撃力に振られたステータス、機体重量も乗った連撃を受け、黒犬の盾が音を立てて碎け散る。

そして更に、碎け散る盾の向こうへと戦神は渾身の突きを繰り出すが……剣先が敵機を貫いた感触は無い。

破砕音に紛れて聞こえるのはE X―Dアビリティの発動音で、優斗は薄く笑った。

そうだ、そう来なくては。

AランクとSランク間にあるステータスの差、それを覆すにはE X―Dアビリティの発動は必要不可欠。

優斗の経験上、技量はその時の運と勢いで超える瞬間もある。

ローカルマッチ、遊びと言えども輝は本気だ。

（昔からそうだった。）

拘りが強くて、それに関しての集中力は凄かったし……何より負けず嫌い）

ベース機体固有のE Xアビリティ、アラヤシキシステムに掛け合わせられるのは同じくアラヤシキ。

同アビリティセットによるボーナスが発生し、効果値は通常のE X―Dアビリティより20%上昇する。

残光が、疾る。

赤く輝く双眸が幾何学的な軌道を、蒼銀の閃きが円弧を描いて戦神

へと襲い掛かった。

基礎ステータスの上昇、レイジ系と呼ばれるタイプのアビリティは単純に強く、使い易い。

銀弧の一撃を、左右の刃を重ねて受ける戦神を更なる衝撃が襲う。

ダメージアラートに次ぐオブジェクトダメージ。

黒犬の一撃はあまりに重く、受けきった筈の戦神の身体を吹き飛ばして壁面へ叩き付けたのだった。

戦神の羽ばたきと同時に、中庭の一角が崩壊。

瓦礫を撒き散らし、噴煙を剣の一薙ぎで吹き飛ばして戦神が飛翔。

追従しつつ散弾を撃ち込んでくる黒犬への刺突は牽制の意味を成さず、闇夜に躍り出る黒影が剣閃と共に戦神の鎧に傷を刻み込んでいく。

戦場はいつしか中庭から城内へ。

黒犬の猛攻を受け、流し、捌き、そして防ぎ切れずに戦神の装甲が、APが削られていくが未だ致命傷は受けていない。

「輝、中々やるじゃん!!」

渡り廊下を踏み破り、跳躍からの急降下。

黒犬が放つ勢いの乗った刃斧叩き付けを、重ねた翼で防御し、翼で切り払うかの様に戦神が羽撃く。

粉塵を吹き飛ばす烈風、開けた視界に黒犬の姿は無いが、赤い残光が行く先を示していた。

向かって左、柄による打突を半身になって避けた先。

続く回転斬りが吸い込まれる様に戦神の胸元へと向かっていき

……

クリティカルヒット、APが大きく減るのを視界に収めながら優斗は、戦神は渾身の一撃を繰り返した。

(機動力は向こうが上、わざと「空けた」胸元は「餌」なんだよ……肉を切らせて、骨を立つ!!)

右手に握る刃、プロミネンスブレイドが黒犬の胸元に突き刺さり、鏢元の宝玉が炎を灯した。

宝玉から燃え上がる炎は刀身を伝い、黒犬へと燃え移り断続的なエフェクトダメージとなってその身を灼き焦がす。

そして更に、衝撃に揺れる黒犬へと左の刃を振りかざし、一閃。

ブレードアックスを握る右腕を肘から切り落とし、戦神がフルブースト。

剣を突き刺したままの突進で黒犬を壁面へ叩き付け、そのまま前進、上昇。

炎と共に壁面が砕け、二機が姿を現したのは古城の頂点近く、尖塔へ続く廊下の外だった。

「やるからには全力だ、容赦無くやらせてもらう」

二つの機影わ包む一瞬の浮遊感。

それを振り切るのは大翼の羽ばたきだ。

全身の推進機器から炎を吹き出し、尖塔へと飛翔。

闇夜に躍り出る戦神は勢いそのままに黒犬の身体を塔の頂上へと叩き付けて、反転。

プロミネンスブレイドが錨元まで突き刺さり、串刺しとなった敵機へと更に、左のブレイクニルブレイドを投擲。

刀槍の如く飛来するそれを黒犬が避ける事は叶わず、剣は右の大腿部を貫通した。

串刺しとなった敵影を見据える戦神の、肩口から伸びる翼膜……三枚羽の外側にマウントされていた左右合わせて四本の刀と更に、尻尾となった竜顎の牙にあたる部分の刀が月光に煌めく。

見えざる手によって抜き放たれた刀を操るのは、月輪を背負って飛ぶ戦神。

AランクとSランクの差は単にステータスだけではない。

ソレはSクラス到達により解禁される、自作モーションパターンを使った所謂“必殺技”の有無だ。

掲げられた右腕が振り下ろされると同時に、六つの刃が解放される。

夜気を裂き、疾る刀が張り付けとなった黒犬へと殺到。

その身体を捧げられた贅と見なす様に、六刃が容赦無く切り刻んでいく。

「必殺……六道断罪」

そして。

鳥葬された死体のように見るも無惨な姿となった機体が、一拍の間を置いて爆散した。

—————

「必殺、技……」

両の掌に収まる画面の中、爆炎の後ろから浮かび上がる“Y o u L o s e”の文字に、輝は見開いていた目をゆっくりと閉じた。

EX-Dアビリティを発動したのにも関わらず、最後の一撃以外はまともに“通らなかった”

寧ろ最後の一撃すら“わざと”打たせたのであろう。

ステータスだけではなく、技量の差、そして必殺技……

「EX-Dアビリティ打った後の動きは良かった、輝は近接戦闘の方が得意かもね。」

近接武器増やすと良いよ、流石に斧一本じゃ弱い

機体も俺みたいにな近接戦寄りにすればもっと強気に攻められるんじゃない？」

スマホを操作しながら、優斗が声を掛ける。

その声に頷き、輝は俯いていた顔を上げた。

悔しいが負けは負けだ。

昨日までCランクだった自分がSランクの相手と戦うには色々足りないモノが多すぎる。

Aランクになったとは言え、燈真とデミ・ウィングの力ありきなのだ。

そう考えればより一層、悔しさが加速し、腹腔に重たいモノが沈む。

“ありがとう、楽しかった”

無意識的に紡がれたその言葉は、優斗へ届く前に……雷鳴に掻き消された。

第八話／閃光

細胞が叫んで軋んだ

苦しい程に魂はここに在った

死んだように生きてくなら

花火のように此処で燃え尽きても

――

何かがおかしい。

剣閃が瞬く度に闇夜が、機体が斬り刻まれる毎に違和感が増す。

片翼が夜気を吹き飛ばし、紅翼は力強く羽ばたく。

湖畔の上空、重力と言う枷は何処へ置いて来たのか。

そんな言葉を見た者の脳裏に浮かべさせる程に、相對する二機のスピードは速い。

デミ・ウイングと朱凰、同じ相貌と翼を持つ二機は互いに刃を振るい、幾度となくその切っ先をぶつけ合う。

「やっぱり、Cランクの動きじゃ……機体じゃない」

蓮の眩きは円弧の軌道を描く刃が切り裂き、燈真の耳には届かずに消える。

デミ・ウイングがその主兵装を分割してからの数分間で、戦いの質は大きく変化していた。

砲撃一辺倒から射撃、剣撃の両方を使いこなす敵機に朱凰は攻め倦ねていた。

先程の眩き通り、その動きはCランクのモノではない。

デミ・ウイングの繰り出す切り払いからの刺突はフェイントで、身を振り避けようとする朱凰へと光弾が撃ち込まれる。

ダメージアラートと共に響くのは破碎音、左肩の装甲が砕け散り、散り落ちる前に猛火を纏った朱凰の蹴りがデミ・ウイングを急襲。

中段蹴り、所謂ミドルキックがデミウイングの腹部に直撃し、衝撃が片翼を揺らす。

しかし、衝撃に双眸が揺れても尚、デミ・ウイングの攻勢は止まら

ない。

蹴りを食らったとほぼ同時に放たれるのは、右手に持つ銃器による打撃。

風を切って振り下ろされる銃身を朱鳳は左手に握る大剣で受け流し、後方へと飛んで距離を取る。

違和感の答えはもう判っていた。

それは、燈真とデミ・ウイングのランク詐称疑惑だ。

燈真とデミ・ウイングはCランクだが、その動きと機体性能はSランクである自分と少なくとも同等。

機体の操作、技量はCPUとの練習やセンスの良きで納得出来るうるが、機体性能はまた別の話。

デミ・ウイングの詳細なステータスは解らないが少なくともAランク以上……恐らくほぼ確実にSランクの機体値を有するだろう。

GBDEX―DWに置いて、各ランクのステータス総合値は決まっている。

機体登録時にステータスは自由に割り振り出来るが、そのトータルな値はどの機体でも同じなのだ。

勿論、ランクアップボーナスで追加されるステータスも同上である。

(だけど、だからこそ……相手の機体は「異質」だ)

デミ・ウイングのステータス値の割り振りがどうなっているかは解らないが、予想は出来る。

機動力は此方がやや上だろうが、攻撃力はデミ・ウイングの方が高い。

攻撃力と機動力、そして防御力。

Cランクの機体がSランクの機体と渡り合うにはそのどれかを犠牲にし、他種に極振り、特化させなければならぬ。

だが、Cランク機である筈のデミ・ウイングはSランクの機体に並ぶステータスを確実に持っている。

ランクの詐称、それが果たして可能かどうか。

ゲームシステムとしてランクの昇格はあれど降格はありえない、ま

ず実装されていない。

アプリをアンインストールして再度ゲームを始めたとしても、最下層からスタートを切るしかないのだ。

違和感から疑問へ、そして疑念は迷いとなって蓮の集中力を蝕み、それを隙と見なしたデミ・ウイングが相對距離を瞬く間に詰めて迫った。

繰り出される幾度目かの刺突、雷刃が闇夜に瞬き、デミ・ウイングの双眸が紅く輝く。

迫る切っ先を双眸に映す朱凰は、反射的に右手のビームライフルを投げつける。

手から放れた銃身を雷刃が貫き、爆発。

炎と煙を突き破り姿を現したデミ・ウイングが更に肉薄。

その胸元から伸びる尖角が、朱凰へと突き刺さる程に二機の距離は縮まり、その視線が交錯した。

「……チート、だな」

掌の中の小さな戦場。

視線を燈真へ向ける蓮は、諦めた様な、掠れた声を出した。

その声を斬り裂くのは閃く銀弧、新たな機影が闇夜に躍り出る。

ーーーー

敵機を鳥葬し、古城を遠くに戦神が夜空を切り裂いて飛ぶ。

輝の黒犬を倒すのに思ったより時間が掛かったが、その分余力はあった。

レーダーに頼らずとも、湖畔の上空に燃える炎を目印に迷う事は無い。

最大戦速、ものの数秒で紅炎と雷光が瞬く戦域へと戦神は進軍する。

「マジか、押されてるじゃん……」

そして、視界に映る相方の姿に優斗は思わず声を漏らした。

漏らしながらも操作は止めず、愛機を朱凰の前に滑り込ませて閃く雷光を剣で受け止める。

二振りの剣を重ねて受け止めたものの、デミ・ウイングの一撃は予想以上に重い。

両の剣で切り払う戦神がフルブースト、全身の推進機器から炎が噴き上がった。

炎吐するブースター、黒光りする大翼で大気を叩く戦神が勢いの乗った刺突を繰り出す。

放たれる一撃、プロミネンスブレイドの切っ先が敵影を……残像を貫いた。

(今の避ける!?)

初速が遅いとは言えこっちの方がスピードある筈なんだけど!

フルブーストからの一撃を避けられた事に優斗は眉根を寄せるが、蓮と朱凰を相手に有利を取っている時点で強敵だとは判断出来た。

しかしそれでも、相方の力量を知る優斗からすれば、蓮の不調を疑いたくなる所だ。

「調子悪い訳じゃないでしょ、何かあった?」

「いや、何にも無い……訳じゃないけど、この機体強いから気をつけろ!」

蓮の応えからするに、予想以上に強いらしい。

そして、その様子を見るに「何か」ある。

「気をつけろと言っても二対一だ、押し切る!!」

様子を伺いたい所だが、先の一撃を避けた所を見るに敵の強さは未知数だ、

ならば出し惜しみする暇は無い。

戦神は剣を握り直し、月光を背に高く飛び上がった。

月明かりに照らされる漆黒の鎧、戦神へと遠く輝く月から一筋の光が降り注ぐ。

ソレは、EX―Dアビリティ発動の印。

黒犬との戦いでは温存していた切り札を、優斗は躊躇いなく使用する。

相方の……蓮の実力は自分より上であり、そんな彼と互角以上に渡りあう相手に本気で挑まない理由はない。

戦神の翼膜が、左右の肩口から伸びる三枚羽が大きく広がる。

黒塗りの外羽とは違い、内側は黄金に輝き、光を受けて更なる煌めきを放った。

更に、両の前腕及び脛部外側の装甲が開き、小振りな羽が姿を現す。月から伸びる光は高純度のエネルギーそのもので、その名をマイクロウェーブと言った。

「EX-Dアビリティ、マイクロウェーブで得た過剰すぎる程のエネルギーを全て、ハイパーモードに回す……」

来ならサテライトキャノンに使われるエネルギーを余す事なく機体の強化に回せば、どうなると思う?」

そう、戦神のベースはガンダムDXであり、翼膜となる三枚羽はサテライトキャノン発射時に展開される放熱板なのだ。

しかし、EX-Dアビリティ発動時においてそれは本来の使用方法とはならなかった。

マイクロウェーブにより得た莫大なエネルギーを、ハイパーモードにより強化された機体全体に行き渡らせる。

そうする事によって生まれるのは、眩過ぎる黄金に輝く戦神だ。

外は大雨、大嵐。

しかし、手の中にある戦場は一時の静寂に包まれる月夜。

雷光が四人を、そして月光が三機の姿を照らす。

—————

タッグマッチにて敗北したプレイヤーは、その視点を好きな位置へ持って行く事が出来る。

勿論、輝がその視線を送るのは燈真のデミ・ウイングの周囲だ。

(蓮君の言葉の意味はわかるよ、デミ・ウイングはおかしい。)

黄金に輝く戦神がデミ・ウイングへ襲い掛かる。

既に六本の刀は抜き放たれており、自我を持って動く刃は様々な角度、位置からデミ・ウイングを削っていた。

更に、刀を相手取るデミ・ウイングの死角から戦神の剣撃が放たれ、片翼に大きな裂傷。

バランスを崩した敵機へ打ち込まれるのは苛烈な連撃。

袈裟懸けの斬り落としから連続突きに繋がり、回転斬りがデミ・ウイングの胸元を、尖角を粉碎した。

「やべ、AP凄いい減った」

確実に「通った」一撃に、優斗は頷く。

二種類のアビリティを組み合わせるエクストラデュアルアビリティ、設定している組み合わせとしては異質だが、レイジ系統としては破格の上昇値を持つだろう。

(今の一撃、通った。けど倒れないなら……!!)

その一撃を受け、大ダメージを負った「だけ」で未だ動くデミ・ウイングもまた、異質。

EX―Dアビリティを発動した戦神の一撃は、Cランクの機体なら確殺出来る威力はある。

それを受けてまだ撃破に至らないならば、更なる威力の一撃を、必殺技を放つしかない。

自らが放つ黄金の輝きで闇夜を切り裂き、戦神が三枚羽を、大翼を広げて高く羽撃く。

引き連れるのは六本の刀と……翼膜の中央に装備されている小刃、その二振りが追加されて数は計八刃。

両の手に握る大剣をデミ・ウイングに叩き付け、その両方を雷刃が受け止めると同時にハウリングライフルが光弾を吐き出す。

しかし、戦神は光弾をもともせず更に更に肉薄し、両の剣を振り下ろした。

受け止めた筈が規格外の剛力で振り切られる剣に、デミ・ウイングがバランスを崩す。

その瞬間を狙って放たれるのは戦神の必殺技。

輝の黒犬を葬った六道断罪ではなく、巻き起こるのは八刃による剣戟の嵐だ。

冷めた夜気を、静寂と月光を切り裂く刃嵐はデミ・ウイングを飲み込まんと迫り、距離を取ろうと羽ばたく片翼をその烈風で捕らえて引き寄せた。

「逃がさない……!!」

全てを斬り裂く刃の嵐に飲み込まれていく、デミ・ウイングの特徴的な片翼。

炎を模した翼は、瞬く間に無惨な程に刻まれていき、吹き荒れる烈風が翼の欠片を巻き上げていく。

そして、嵐に捕らわれ身動きが取れないデミ・ウイングへと戦神が疾り……

「必殺、〃八大龍王・斬〃!!」

烈迫の掛け声と共に、重ね合わされた二振りの刃が振り抜かれた。それは眩い黄金の輝きを放つ極刃、戦神の放つ必殺の一撃。

その一撃は、自律駆動する八刃が生み出す刃嵐ごとデミ・ウイングを一刀両断……する筈だった。

だが、しかし。

————DamageLimitOver

————ModeChange

刃の嵐は極光の一撃で両断されども、デミ・ウイングは未だその存在をリーダーに映る光点として表している。

剣閃により掻き消されそうになっていた嵐を〃餌〃に、燃え上がるのは異質な炎。

嵐を、極光を突き破り、そしてノイズと共に姿を現したのは……

————〃RaidBattleMode〃

不意に響く電子音声、ノイズと重なり不明瞭ながらもその声は確かに四人の耳へと飛び込んでいた。

「レイドバトルモード、だっけ……」

聞き慣れない電子音に燈真以外の三人は顔を見合わせ、それぞれの視線が燈真へと向けられた。

しかし、当の本人はその視線に気付けない。

眩く燈真の視線の先では、デミ・ウイングが両腕を広げ、大きく夜空を仰ぎ見ている。

しかしその姿は、燃え盛る緑炎に包まれ、紅の双眸には禍々しい燈火が宿っている。

両肩前面と左右膝内、四枚の翼の中央に輝くマナクリスタルから溢れ出すのは地獄の焰。

闇夜を灼き尽くさんとその勢いを増す獄焰が裂傷を、様々な傷を癒し、APを回復させる。

大きく仰ぐその背中、特徴的な片翼はその可動域の限界を超えて広がっていた。

付け根は片方なれども、片翼を成す四枚の翼の内二枚が右側へと倒れるように位置を変えて広がり、両翼となって力強く羽撃く。

片翼となり自由を失ったモノが、羽撃く為の翼を、一對の焰翼を得たならば。

「アビリティ……デュアル・ウイング

まだやれる、まだ飛べる」

畏怖と驚愕、警戒とそして……懐古。

四人の視線を振り切るように、デミ・ウイングは様々な感情の渦巻く宵闇を、焰を纏い飛翔する。